

県道改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報集

福 万 遺 跡

原 中 村 遺 跡

1995年3月

香川県教育委員会

福 万 遺 跡

例　　言

1. 本書は県道高松長尾大内線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。
2. 本遺跡は木田郡三木町大字氷上字福万に所在する。
3. 調査は香川県土木部道路建設課より依頼を受け、香川県教育委員会が実施した。
4. 調査は文化行政課主任技師國木健司が担当した。
5. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔、方位は真北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図「志度」を使用した。
6. 発掘調査、整理作業を通じて香川県長尾土木事務所、三木町教育委員会、讃香川県埋蔵文化財調査センター諸氏、その他関係者各位より多大な御協力、御援助を得た。
7. 本書の執筆、編集は國木が行った。

目 次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	立地と環境	1
第3章	調査の方法及び経過	4
第4章	調査の結果	5
第5章	まとめ	9

第1章 調査に至る経過

東讃地域の大動脈である県道高松長尾大内線は20年ほど前から大川郡内を皮切りにバイパス建設工事が進められ、平成元年度からは三木町内区間についても整備が開始された。町内の東端長尾町境より西に向かって順次工事が進められていったが、この間平成3年度には国体開催を契機として町の東半部（新川以東の区間）が重点整備されることになり、国庫補助事業として大がかりな試掘調査が実施されている。町中央付近の平野部を横断する路線計画であるが、この区間内では埋蔵文化財包蔵地は確認されなかった。

その後、新川以西の区間が高松市境に至るまで順次整備されることになり、5年度には新川から吉田川に至る延長600mについて用地買収が進められた。この区間の工事は現在の町道（幅7m）を4車線道路に拡幅するという計画である。

年度当初の公共土木工事計画の照会で県道路建設課よりこの事業計画について連絡を受けた県教育委員会は同年4月および7月に現地を踏査、両河川間のほぼ中央付近に延長200mにわたって微高地が所在していることを確認した。そこで、この区間を対象に試掘調査を実施する必要がある旨長尾土木事務所に連絡し、そのための条件整備を併せて依頼した。

用地買収は5年度末の予定であったが、買収終了後に試掘調査を行うことすると対象面積がかなり広く工事を予定している6年度中の本調査自体が困難となる可能性もあったため、試掘調査は用地買収前に地権者の承諾を得て行うこととした。こうして平成5年12月7日から8日まで実働2日間で延長200mの対象地の試掘調査を実施した。その結果、東半部の約100mの区間では厚く堆積した砂層中に近世遺物等の包含が認められたのみで遺構は確認されなかったが、西半部では溝等の遺構とともに弥生土器等の遺物包含層も確認されたため事前に保護措置が必要であると判断された。保護措置の内容については道路建設課、長尾土木事務所と協議を行い、6年度中に本課が主体となって事前調査を実施する方向でまとまった。

6年度に至り用地買収が終了した区間については宅地部分を除き着工するはこびとなった。調査対象地となった延長100mは買収終了後一括して調査を行うこととしていたが、西半部40m余りの区間の用地買収が順調に進まなかったため、あらためて調査方法等について調整を行った。止むを得ない措置であるが、事前調査は東半部の延長60mを先行して行うこととし、西半部はその結果をみて再度協議を行うという方向でまとまった。こうして、平成6年11月17日から12月7日までの予定で事前調査を開始した。

第2章 立地と環境

三木町は町中央部を平野部が、南半部及び北端付近を山塊が占める。南方の阿讃山脈に源を発する吉田川、新川等の中小河川は中流域にあたる町中央部に沖積平野は概ね平坦地をな

しておりその形成過程および微地形復元には困難な部分も多い。したがって、この地域の遺跡の分布、展開等は未だ明確とはなっていない。

福万遺跡は新川と吉田川が最も接近した地区のほぼ中間の位置にある。地形的には、両河川の氾濫原部分より僅かに高い位置にあり比較的早い段階で段丘として安定した地域と推定される。

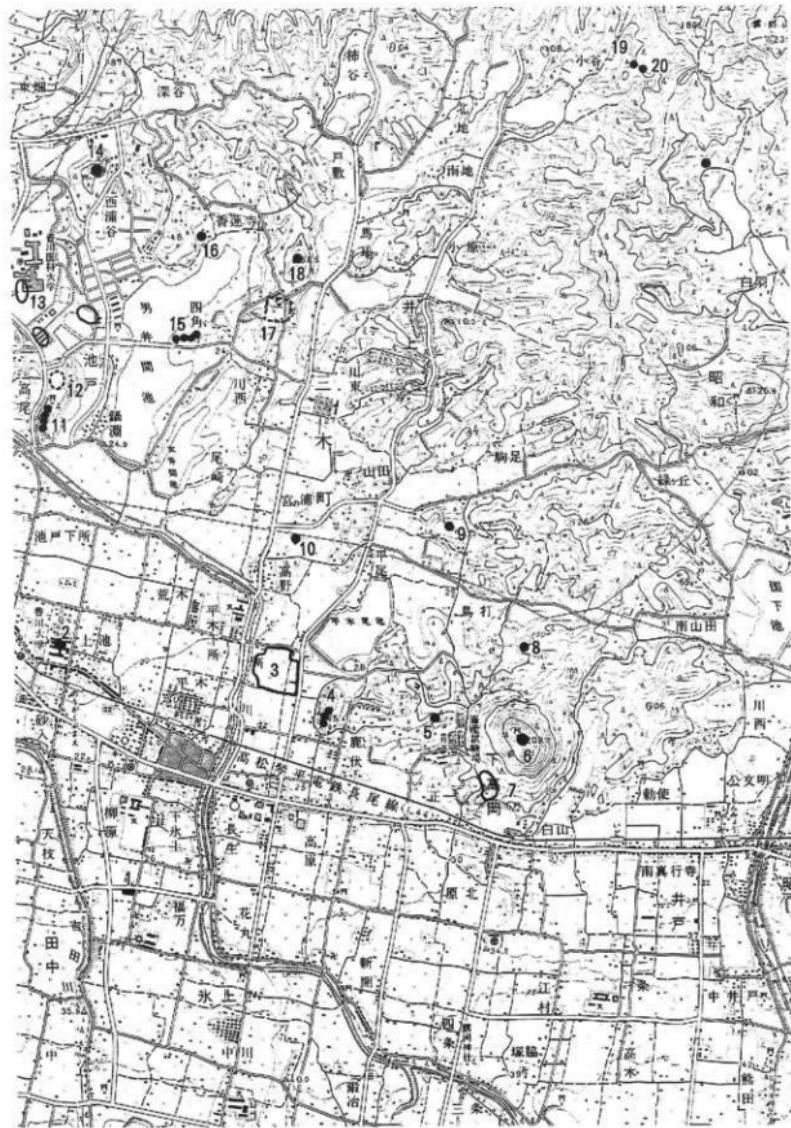
町内は近年の発掘調査により弥生時代から中世にかけての遺構、遺物の資料が急速に充実してきている。縄文時代以前については未だ明確ではないが、弥生時代前期には農学部遺跡や鹿伏地区において新段階の土器が多量に出土している。農学部遺跡については平成4～6年度の県教育委員会による試掘・立会調査により敷地南半部に同時期の集落が展開している可能性が指摘されている。中期については白山3遺跡で竪穴住居7棟が検出されている他、南方丘陵部の西土居遺跡で多量の土器が出土している。後期には町内各所で遺物の出土が確認されており、鹿伏中所遺跡や西土居遺跡等の拠点的な集落遺跡が調査されている。また、後期から終末期にかけての墳墓群も高尾遺跡の石蓋土壙、方形台状墓で土壙を主体部とする山大寺池西丘上3号墓、小型の石室の可能性もある天満遺跡、多くの土壙墓群からなる天神山古墳群、配石土壙等が確認された白山3遺跡等が近年調査されている。また、池戸八幡神社1号墳は前方後円形のマウンドをもつ墳丘墓の可能性が指摘されており注目される。

古墳時代については前期から中期前半にかけての古墳の内容が明確とはなっていないが、中期後半の権八原古墳群が古式群集墳として著名であるほか、後期初頭の西土居古墳群、堀切古墳等の調査が近年実施されている。横穴式石室を主体部とする後期古墳は南部丘陵に数多く所在しておりその密度においては県内でも有数の地域とみなすことができる。古式の横穴式石室をもつ丸山古墳、かんかん山古墳群（12基）、蛇の角古墳群（16基）、城池古墳群（15基以上）をはじめとして100基近い古墳の所在が知られている。北部丘陵にも7世紀前半の築造が考えられる風呂谷古墳が調査されているほか、西浦谷古墳、深谷古墳、椿谷古墳等当該期と推定される古墳の所在が知られている。

古代の遺跡は白鳳期から奈良時代にかけて相次いで建立されたと考えられる上高岡廃寺、長楽寺等の古代寺院が知られるほか、同時期の集落遺跡も南天枝地区で確認されている。

1 福 万 遺 跡	8 鳥打大西谷古墳群	15 七 つ 塚 古 墳 群
2 農 学 部 遺 跡	9 駒 足 古 墳 群	16 香 蓮 寺 跡
3 鹿 伏 中 所 遺 跡	10 高 野 八 幌 社 古 墳	17 始 覚 寺 跡
4 天 神 山 古 墳 群	11 池 戸 八 万 神 社 古 墳 群	18 富 士 の 越 山 頂 古 墳
5 白 山 1 遺 跡	12 池 戸 八 万 神 社 裏 古 墳 群	19 小 谷 窯 跡 群
6 白 山 2 遺 跡	13 権 八 原 古 墳 群	20 塚 谷 古 墳
7 白 山 3 遺 跡	14 西 浦 谷 遺 跡	

周辺の遺跡地図

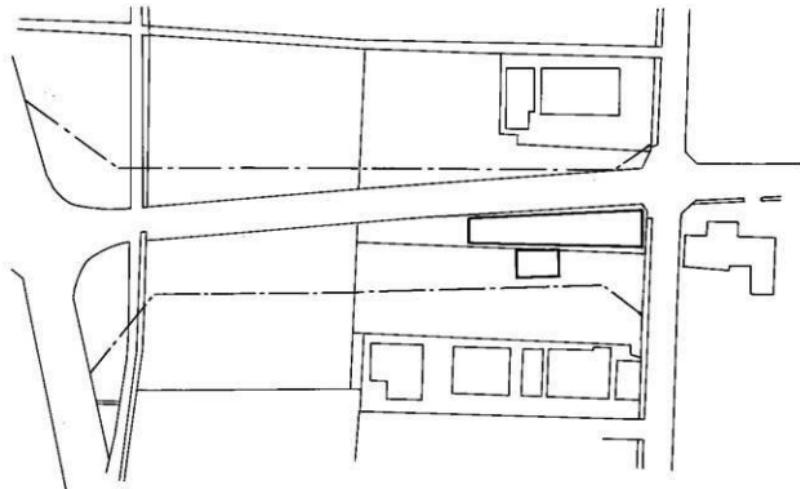


第1図 周辺の遺跡地図

第3章 調査の方法及び経過

調査は延長約60m、幅15m前後の東西方向に細長い地区を対象としている。この範囲内で排土置場も確保する必要がありかつ試掘調査結果からもて遺構密度は希薄と思われたため、調査は北半部を先行して実施し遺構検出部分について南半部も拡張して調査を行うという方法をとった。調査は遺物包含層上面まで重機を用いて掘削し、包含層及び遺構発掘のほとんどは人力で行った。北半部の調査でも西半部は遺構が検出されず遺物包含量も希薄であったため、西端付近の約15mの範囲は調査対象地から除外した。

北半部の調査区の規模は延長約42m、幅5~7mである。このほぼ中央付近で調査区に斜行する浅い流路を検出したが埋土中に比較的多くの遺物が含まれていたため、この南への延長部分については調査区を拡張して調査を行うことにした。拡張区の規模は長さ10m、幅7mである。この拡張区を含めた調査実施面積は320m²である。



第2図 調査区位置図 (1/1000)

第4章 調査の結果

I 基本層序

調査対象地区が本来新川と吉田川間の低湿地にあたるが、弥生時代以降は比較的安定したようではほぼ全域にわたり同一層序が水平堆積している。ただ、部分的に粗砂層の混入が認められたため数度の氾濫にみまわれたものと考えられる。

基本層序は大きく7層に分けられる。1層は耕作土及び床土層である。2層は暗灰色砂質土、3層は暗黄色砂層で3層下半部は薄い粗砂層となる。遺物は両層ともにほとんど皆無に近い状態であった。4層は厚さ10cmほどの暗灰色粘土層で中世遺物を小量包含している。同層直下の5層直上から古代末～中世初頭と考えられる溝を2条検出している。

5層は暗茶褐色粘質土で古墳時代終末期奈良時代にかけての須恵器、土師器片を小量包含している。厚さは10～10cm程度である。6層は暗灰色砂質土で部分的には同層を欠く地区も認められた。同層中には弥生時代前中期から古墳時代前期にかけての土器片が包含されていたが、東半部及び西端付近はきわめて希薄であった。調査区中央付近で同層が粗砂となる部分が南北方向に帯状に広がっており小規模な流路と考えられたが、この粗砂中には保存状態が比較的良好な同時期の土器、石器等が比較的多く包含されていた。

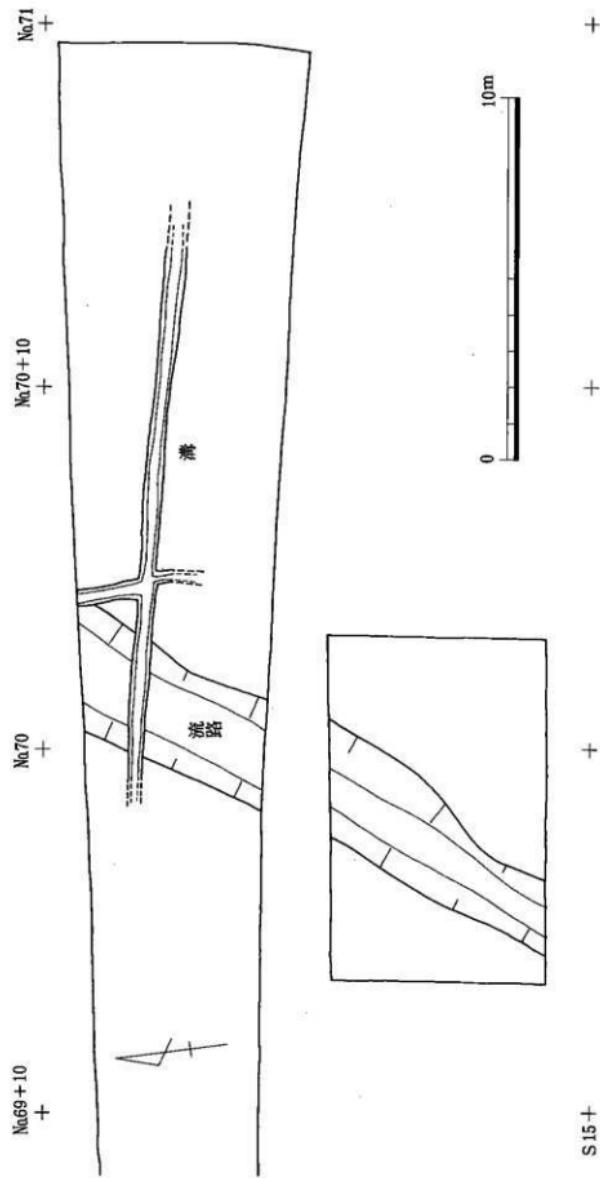
7層は灰褐色粘質土で遺物は包含していない。なお、調査区西端付近は3層直下に青灰色粘土が厚く堆積しており、4～6層の形成はみられない。この青灰色粘土層はさらに数層に細分されるが、最上層には7世紀代の須恵器、土師器等が小量包含されていた。

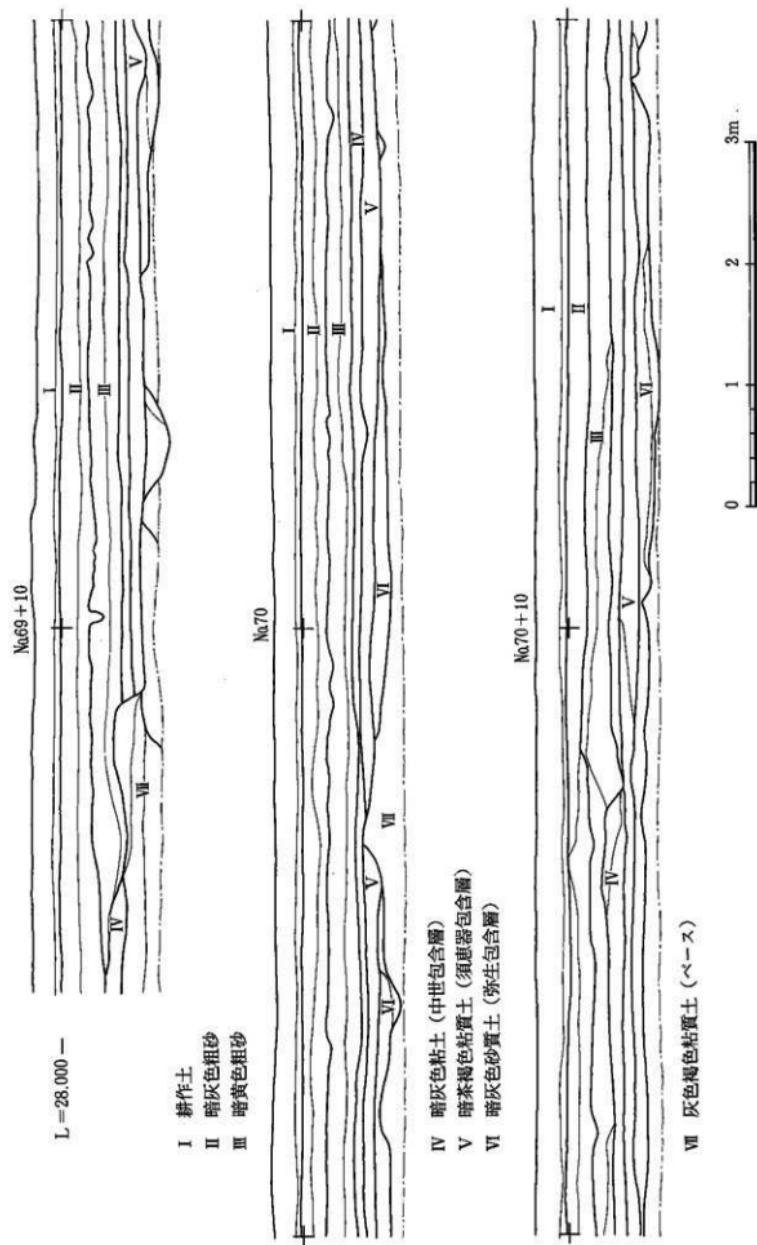
II 遺構

5層直下から溝2条を検出している。調査区の中央付近で交差する南西及び南北溝で、両者に切り合いは認められなかった。東西溝は検出した西端付近で幅約40cm、深さ5cm程度であるが、東に向かって次第に深くなり東端付近では幅60cm、深さ20cmをはかる。断面はU字形を呈し、埋土は2層に分けられる。上層が黄灰色粘土、下層は暗灰色粘土層である。下層から土師器碗等が出土しており、中世初頭に機能していたものを考えられる。

7層直上で検出した小流路は幅2～4m、深さ15cm程度をはかり、北東方向にわずかに斜行してながれている。

第3図 連絡配管図





第4図 北壁土層図

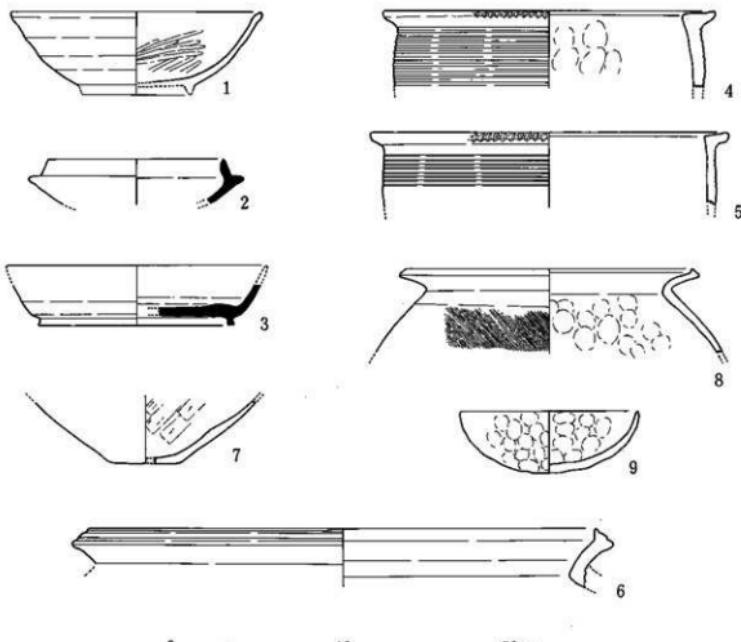
III 遺物

全体的な遺物量はさほど多くないが、各層位及び遺構の帰属時期が判明する良好な資料には恵まれた。以下、遺構・層位別に主なものを報告する（第5図）

1は東西溝から出土した土師器碗で口径14.5cmをはかる。口縁部はわずかに外反させている。底部は剥離しているが本来高台が存在していたものとみられる。内面に粗いヘラミガキ調整を施している。

2は調査区西端付近の青灰色粘土層から出土した須恵器杯身で口径10.1cmの小型品である。立ち上がりは内傾し高さ1cmをはかる。焼成不良で黄灰色を呈する。摩滅が著しいため調整は不明である。3は5層出土の須恵器杯身である。口縁部を欠くが口径15cm、高さ3.5cm程度と推定される。高台はわずかに内傾し高さ0.5cmをはかる。底部外面はヘラケズリ後ナデ、他は内外面ともにナデ調整を施している。焼成良好で青灰色を呈する。8世紀前半頃に位置付けられよう。

4～9は6層出土土器である。4、5はいずれも倒L字形の口縁部をもち、体部外面にはヘラ描き沈線をめぐらせている。口縁端部には刻みが施されている。4はヘラ描き沈線が11条



第5図 出土土器実測図

以上と多条化しており、沈線自体も幅広で深い凹線状を呈している。一方、5の沈線は8条で細かく浅い点に特徴がある。4の内面には指頭痕が残る。胎土は粗く焼成はやや不良で黄褐色を呈する。5は胎土は粗いが焼成良好で灰褐色を呈している。いずれも弥生時代前期末葉頃に位置付けられるが、5はローリングをほとんど受けておらずこの調査区の比較的近い位置に同時期の集落遺跡が所在している可能性を示唆している。

6は口径29.4cmをはかる大型の甕口縁部で、上方に拡張した幅広い端面に2条の凹線をめぐらせている。凹線は鋭い沈線状を呈するものである。焼成良好で淡黄灰色を呈している。弥生時代後期初頭に位置付けられるであろう。

7は甕底部で平底を留めているが稜は丸みを帯びている。内面にはヘラケズリが顕著にみられる。茶褐色を呈し胎土中に角閃石を含む下川津B類土器で、弥生時代後期末に位置付けられる。

8は口径16.6cmをはかる甕で、口縁端部を上方に摘み上げて拡張している。体部にかけての屈曲は外面では明瞭であるが、内面では緩く屈曲するため稜が明確ではない。体部外面に細かいハケ調整を施し、内面には指頭痕が明瞭に残る。焼成・胎土ともに良好で明茶褐色を呈している。9は小型鉢で口径10.2cm、高さ3.6cmをはかる。口縁端部は丸く、内外面には指頭痕が明瞭に残る。胎土中に金雲母を多く含み、焼成やや不良で茶褐色を呈する。8・9については古墳時代前期初頭に下る時期の所産であろう。

6層出土遺物は他に砥石、サヌカイト片等がある。また、土器細片は比較的多く出土しているが、これらについては胎土、調整、文様等からみて弥生時代前期末及び後期末段階の遺物が主流を占めているようである。

第5章 まとめ

今回の福井遺跡の調査では各時期の良好な遺物が出土しているものの、遺構内容が貧弱であったため遺跡の内容、性格等を知ることはできない。むしろ、弥生時代前期末から中世にかけての良好な土器が出土したことから周辺に同時期の集落域が展開していることを確実なものとしており、この点にこの調査の最大の成果が認められる。今回の調査区は集落域の縁辺部に相当するものと位置付けることが可能であろう。

各時期の土器のうち注目されるのは弥生時代前期末の土器片である。三木町内ではこれまでにほぼ同時期の遺物が農学部遺跡、鹿伏古川堤防改修地区等で出土しているが、それらの遺跡とはかなり距離を隔てており同一の集落とはみなしがたい。今回の調査対象地の南方に同時期の集落が存在していることは確実であることからすれば、同一の町内に弥生時代前期末の遺跡が3遺跡所在していることになる。東讃地域では集落遺跡の調査が進んでいないとはいえ、現時点では遺跡の密集度において他町を圧倒していることになろう。三木町内においては比較的早い段階で農耕集落が平野部に展開しており、低湿地の開発が進められていた事実を示すものとして注目しておきたい。

原中村遺跡

例　　言

1. 本書は県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。
2. 本遺跡は木田郡牟礼町大字原字中村に所在する。
3. 調査は香川県土木部道路建設課より依頼を受け、香川県教育委員会が実施した。
4. 調査は文化行政課主任技師國木健司が担当した。
5. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔、方位は真北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図「志度」を使用した。
6. 発掘調査、整理作業を通じて香川県長尾土木事務所、牟礼町教育委員会、牟礼町文化財保護審議会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター諸氏、その他関係者各位より多大な御協力、御援助を得た。
7. 本書の執筆、編集は國木が行った。

目 次

第1章	調査に至る経過と調査の経過	1
第2章	立地と環境	3
第3章	調査の結果	4
第4章	まとめ	9

第1章 調査に至る経過と調査の経過

近年高松市と東讃地域とを結ぶ大動脈である国道11号線は大渋滞が続き、その緩和のための道路整備が本県にとって大きな課題とされてきた。県道高松志度線建設はその一環として計画された路線で、本県の重要施策の1つとして整備が急がれることになった。

全長6.5kmに及ぶ建設予定地のうち高松市内区間は平成4年度の分布・試掘調査により弥生時代を中心とする集落遺跡の所在が確認され、平成5～6年度に事前調査が実施されている。路線東端の志度町区間にについても平成5年度に分布・試掘調査を実施し、5年度～6年度に事前調査が行われている。

以上の2地区についてはバイパス路線として整備が進められたものであるが、中央付近の木田郡牟礼町内についてはほとんどの部分が現道拡幅の形で整備されることになった。工事は山間部を中心に平成4年度より実施されてきたが、今年度からは原地区の平野部においても用地買収が終了した範囲から工事が行われることになった。工事対象地の周辺にはかつて堅穴内から多量の土器が出土し弥生時代後半の標式遺跡とされていた著名な原遺跡が所在しており関連遺構の検出が予想されたことから、県教育委員会は昨年度より県道路建設課及び高松土木事務所と用地買収状況や工事計画について密接な連絡をとりあってきた。

分布調査によって試掘調査が必要とされたのは延長約1.3kmの範囲である。そのうち中央以西の約900mの拡幅予定地については今年度4月になって用地買収が急速に進展しているとの連絡が高松土木事務所より入った。6割程度の買収状況であったがその範囲の試掘調査によって遺跡の所在状況はほぼ想定可能と考えられたことから、県教育委員会は直ちに試掘調査の準備を開始した。その時期については夏期の水田耕作が予定されていたことから稲刈後の11月に実施することで調査がまとまった。

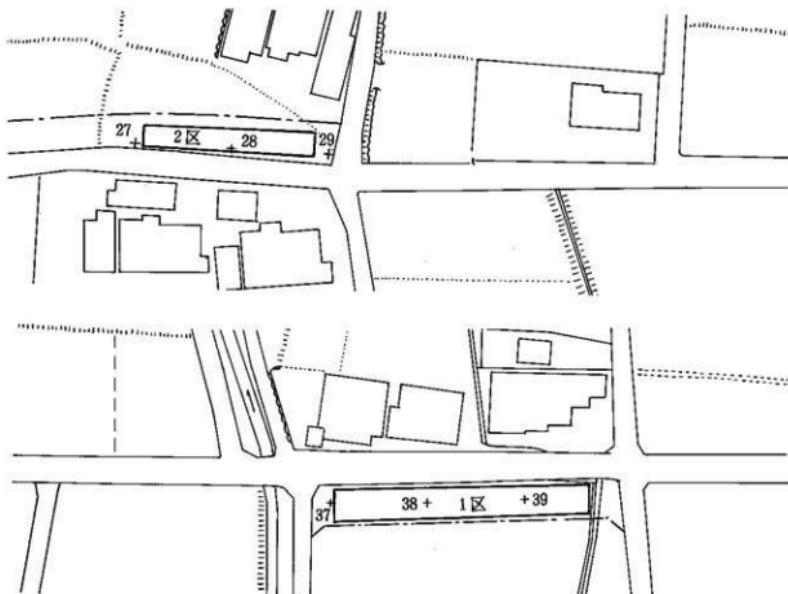
試掘調査対象地は南から北に派生する3本の低丘陵とその間の谷筋とで構成される。試掘トレンチは8本設定したが、1・2トレンチは東端の、3～5トレンチは中央の、6～8トレンチは西端のそれぞれ丘陵上に設定したものである。1トレンチは削平が著しいため床土直下に地山を確認したが、2トレンチからは5～15cm程度の厚さの弥生土器包含層下からピット、溝、土坑等を検出した。3トレンチは谷部に相当する位置であり、中世以降の遺物が少量出土したのみで遺構は検出されなかった。4トレンチは丘陵の東斜面部に相当し、小規模な流路とともにピット群を検出した。小流路の埋土中からは多量の弥生土器片が出土している。5トレンチの地区は丘陵の稜線上に相当するが、削平が著しく遺構・遺物ともに検出されなかった。6～8トレンチは丘陵西斜面部に相当するが、少量の土師器片が出土したのみで遺構は検出されなかった。

以上の試掘調査結果からみて2及び4トレンチを設定した水田2筆約600m²については文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断されたため、その取り扱いについて道路建設課と協議を行い文化行政課の直営事業として事前調査を実施することになった。調査時期については工事が緊急を要することから今年度中に実施する必要があったため、協議後直ちに予算措置等の調査準備にとりかかった。こうして平成7年1月17日から2月10日までの予定で事前調査に着手した。

調査区が2か所に分かれていたため調査は2トレンチを設定した東側のほ地を1区、4トレンチを設定した西側のほ地を2区と2地区に大別して実施した。1区は延長約55m、幅約6m、2区は延長約35m、幅6～7mの調査区である。両地区ともに調査区の細分は行っていない。

調査は1区から行った、1区はかつて基盤整備事業に伴って地下げが行われていた地区であり近年の搅乱も著しかったため遺構の保存状態は極めて不良であった。削平を免れた溝、土坑等が検出されたが、各遺構の性格を把握し得たものは少ない。遺構面直上に堆積していた厚さ5～30cmの搅乱土中には比較的多くの弥生土器、陶器等の遺物が含まれていた。また、調査区中央東寄りの位置から小規模な流路と思われる浅い落ちを検出したが、この埋土中からは多くの弥生土器、縄文土器等が出土している。

2区は西端付近がやはり削平を受けていたが、中央以東の遺構保存状態は良好であった。試掘調査で確認していた弥生土器包含層の上面で精査を行ったところ比較的多くのピット群を検出したため、重機による掘削は包含層上面で中止し、包含層発掘は人力で行った。上層遺構は埋土中から多くの土師器、須恵器片が出土しており、奈良時代を中心とする時期のものと推定された。弥生土器包含層直下の地山面からは調査区に直交する小流路を検出したのみで集落関係の遺構は検出されなかった。遺構発掘後2月6日から本格的に実測作業を開始したが、この間に牟礼町文化財保護審議会の視察を受けた。埋め戻しは7日から1区より開始し10日に2区の埋め戻しを完了して全ての作業を完了した。



第1図 調査区配置図 (1/1000)

第2章 立地と環境

牟礼町は県都高松市の北東部に接する位置にあり、北は木田郡庵治町、南は同三木町、東は大川郡志度町と境を接している。牟礼町の東半部に位置する原地区は南部の三木町境を200m級の連山が占め、北は瀬戸内海に面している。南部丘陵からは北に向かって幾筋もの低丘陵が延び、その先端付近に小規模な扇状地を形成している。県道高松志度線は南部の丘陵地帯と北部の平野部の境界付近を東西方向に横断している路線で、北に向かって派生した丘陵群とその間の谷部との地形変換は比較的明瞭な位置にある。

今回調査対象となった拡幅予定地は1区が低丘陵西側斜面部、2区が谷を挟んで西に隣接する低丘陵の東斜面部に相当する。いずれも丘陵稜線上は削平が著しく造構は検出されなかつたが、削平を免れた斜面部で造構、遺物が検出されたものとみなされる。1区から南に約100m丘陵を越った地区には堅穴中から多量の完形土器が出土した原跡が所在している。当時の出土状況から弥生土器焼成土坑の可能性も指摘されているが、実態は不明な造構である。出土土器は広口壺、甕、鉢、高杯等で主要な全器種が揃っており、本県における弥生時代後期後半の標式資料とされてきた。周辺には同時期以降の集落遺跡は確認されていないが、原地区東端の丘陵部からは団地造成に伴い弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土している。出土状況は明確でなく、造構内容も不明である。

調査対象地周辺には丸山古墳、石塚古墳等が所在しているが、前者が団地造成に伴い既に消滅しているなど内容が判明しているものはない。他にも古代以前の遺跡はほとんど知られておらず当該地周辺の遺跡所在状況の把握と古代以前の歴史の解明は今後の課題である。

- 1 原中村遺跡
- 2 原遺跡
- 3 石塚墳
- 4 丸山古墳
- 5 茶臼山經塚墳
- 6 房前出城墳
- 7 羽間遺跡
- 8 幡羅城跡
- 9 風呂谷古墳
- 10 多和神社古墳
- 11 越窓古墳
- 12 八丁地遺跡

第2図
調査対象位置図



第3章 調査の結果

1. 基本層序

1区は東半部では耕作土下に弥生土器を比較的多く包含する搅乱土が堆積していたが、削平が著しく旧状を留める遺物包含層はほとんど残存していない。中央付近は搅乱土直下が遺構面となり遺物量もほとんど皆無に近い状況であった。西端付近は搅乱土の堆積も認められず床土直下が地山面となっていた。ただし、調査区東端付近で検出した浅い落ちの部分では5~25cmの厚さに暗灰褐色砂質土が堆積しており、同層中には比較的多くの弥生土器が包含されており、ごく少量ではあるが縄文土器の包含も認められた。

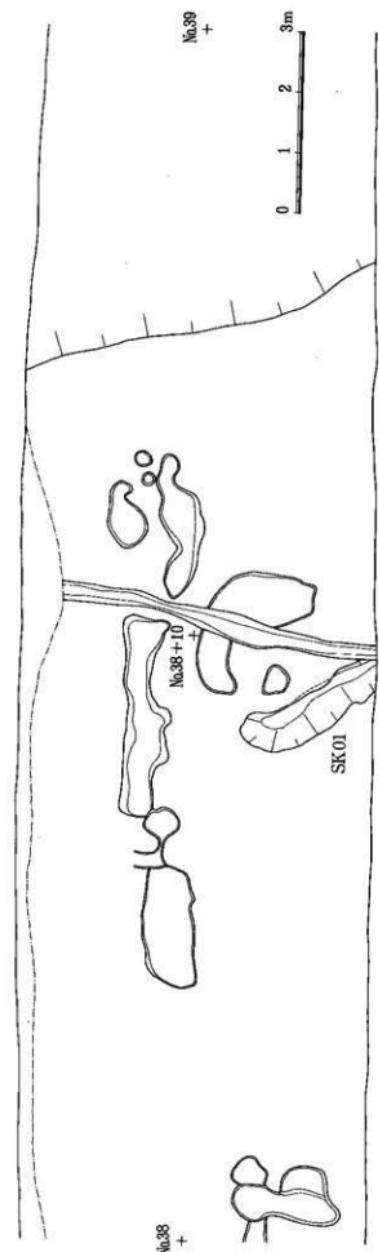
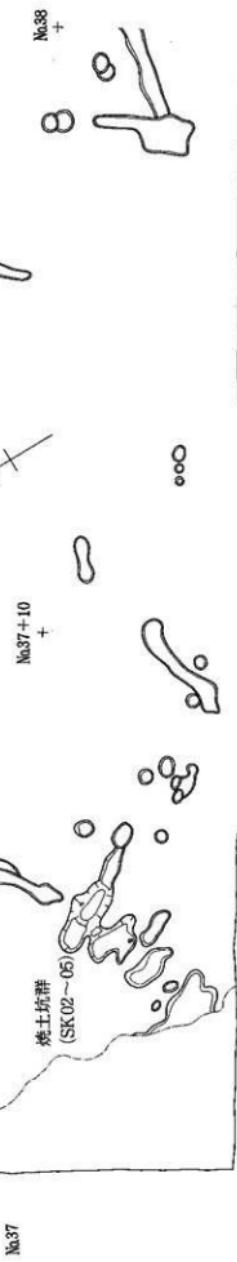
2区は西端付近は耕作土直下が地山となるが、中央付近以東は緩やかに東に向かって下る傾斜部に厚い砂質土が堆積しており、その最上層の茶褐色砂質土上面が弥生時代の遺構面として機能している。この遺構面は調査区内ではほぼ水平面を保っている。No27+6~10の区域には弥生時代のベースにわずかな凹みが認められ、比較的濃密な弥生土器の包含層を形成している。包含層の厚さは最大で20cmを測る。またNo27+18の位置で調査区に直交する小規模な流路を検出した。幅1.5~2m、深さ75cmを測り、埋土は暗灰色粗砂と細砂が複雑に入り組んでいるような状態であった。粗砂中には多量の弥生土器が包含されていた。

東に向かって下る斜面部の範囲内では弥生時代のベース上に一様に厚さ10cm前後の灰茶褐色砂質土（V層）が堆積していた。同層中には少量の弥生土器が包含されている。この上面が奈良時代の遺構面として機能しており、比較的多くのピット等の遺構を検出した。この遺構面上にはやはり一様に須恵器、土師器等を包含する黄褐色砂質土（Ⅲ層）が堆積している。同層上面からは中近世の遺構を検出している。

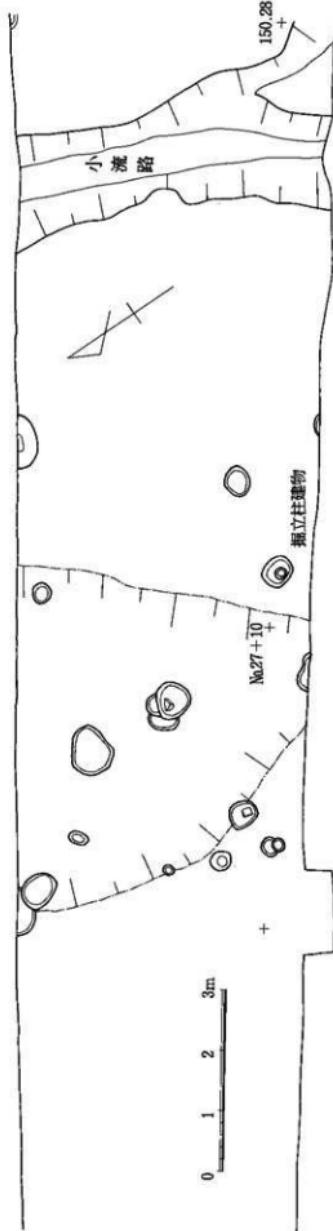
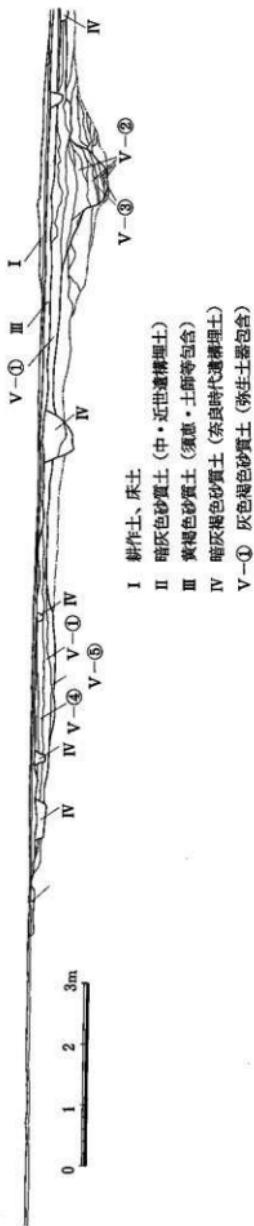
2. 遺構

1区からは不定形の土坑、小溝、ピット等を数多く検出したが、削平が著しいため遺構の性格が判明したものは少ない。最も多く検出したのは不定形土坑群であるが、それらのうちSK01は幅50cm、深さ30cmと比較的の保存状態が良好な例である。埋土は暗灰褐色粘質土で少量の弥生土器を包含していた。東辺中央付近で掘り方がオーバーハングしているが、西辺部は緩やかな傾斜で掘削されている。ベースとなっているのが黄褐色系の粘質土であることから粘土採掘土坑の可能性も認められる。調査区の西端付近で検出したSK02~05は埋土が灰黒色粘土であり炭化物を多く含む点で様相が異なる。掘り方はU字形に浅く凹んでいる。弥生土器が少量出土しており弥生土器焼成土坑群の可能性もあるが、焼土面の存在は認められなかった。

2区からは小流路の他多くのピット群を検出している。それらのほとんどは奈良時代に属するものと考えられる。調査区が狭かったため各ピット群の配列が判明したものは少ないが掘立柱建物群からなる集落が周辺に展開していたものと考えられる。唯一SB01が一部配列の



第3図 1区地質配置図



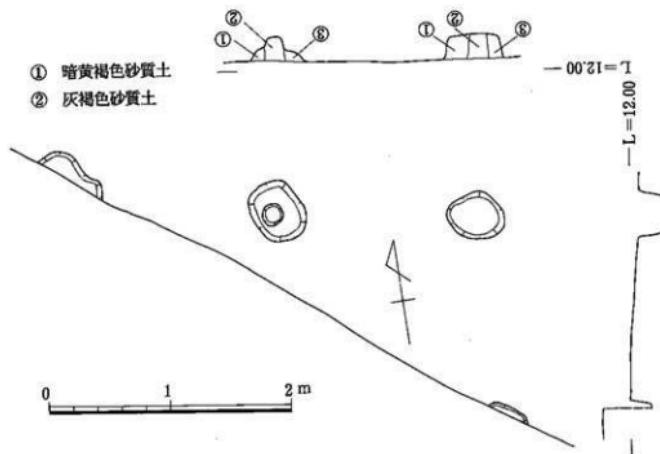
第4図 2区中央以西遺構配置図及び土層図

判明した据立柱建物で調査区内で東西2間、南北1間の配置が確認された。各主柱穴間の距離は1.8m前後で、主軸方位はN81°Wである。P1及びP2は柱痕が残存していた。V層上面を造構面としており、埋土も7世紀末から奈良時代前半期の遺物が出土した造構のものに近似している。また、ピット中から須恵器片も出土しており奈良時代を中心とする時期の所産と推定される。

3. 遺物

1区では東端付近の落ちの部分から弥生土器、縄文土器等が比較的多く出土しているが詳細の判明するものは少ない。

2区は小流路中から多量の弥生土器が出土している他、奈良時代のピット群中から須恵器、



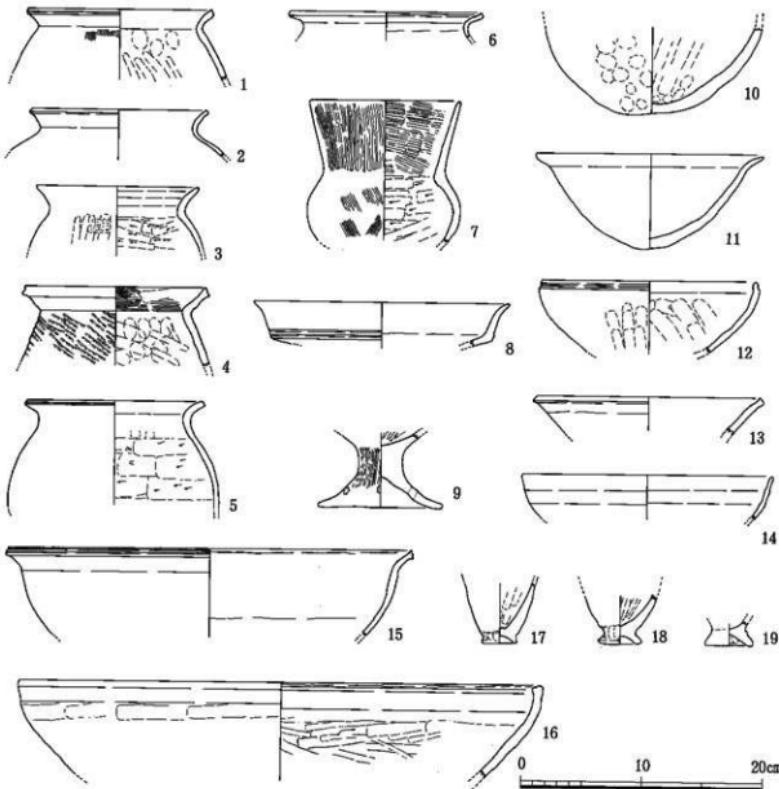
第5図 据立柱建物実測図



第6図 2区ピット中出土土器実測図

土師器等が出土している。第6図1～5はピット中から出土した須恵器である。2～4は小流路を以東から検出した一辺約90cmの大型ピット出土の須恵器蓋杯である。蓋のつまみ部分は出土していないが口縁端部は短く折り返しておりかえりはみられない。杯身の高台は短く内傾する断面形をもつ。奈良時代前半期を中心とする時期に位置付けられよう。

第7図は小流路中から出土した弥生土器である。おおむね弥生時代後半から庄内式段階併行期にかけての所産と推定されるが、保存状態が良好なため今回の調査区に近接して集落域が展開していたものと推定される。7は下川津B類土器である。



第7図 小流路内出土土器実測図

第4章　ま　と　め

弥生時代後期後半の遺跡として著名な原遺跡であるが、これまで詳細な発掘調査が行われたことはなく遺跡の内容等は不明であった。今回の調査でも遺構内容が明確となったものは少なく特に弥生時代後期の遺構は不明瞭なもののが多かった。同時期の遺跡に関しては、中村地区の低丘陵上に広範囲に集落関係遺跡が展開していることが判明した点に成果を求めることが認められよう。

調査区が狭いこともあり、巨大なピットが存在している点も遺跡の性格を暗示しているものとして興味深い。唯一確認された掘立柱建物の主軸方位が推定条里方向に一致していることから、牟礼町内においても早い段階で条里制の施行が実施されていた可能性も認められる。また、現在志度町に所在している志度寺が奈良時代には原地区に建立されていたとの伝承もあり、今回検出した遺構がその存在を示唆するとともにそれに関連した遺構とみなすことも可能かもしれない。いずれも今回の調査のみでは推定にすぎないが、今後の調査によっては次第に明らかになってくるであろう。なお、1区の東方に所在する低丘陵部分は同路線建設に伴い次年度以降継続して試掘調査等を実施していく予定である。



1. 1区全景（東から）



2. 1区全景（西から）



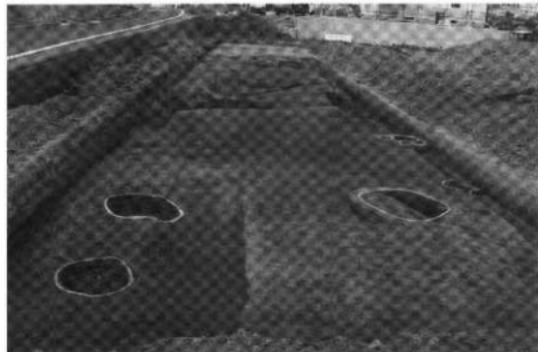
3. 1区中央不定形土坑
(S X 01)



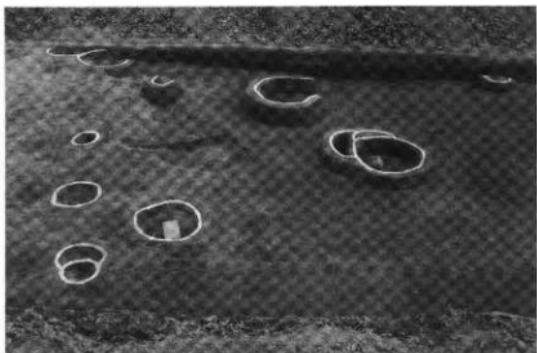
1. 1区西端付近焼土坑



2. 2区全景（西から）



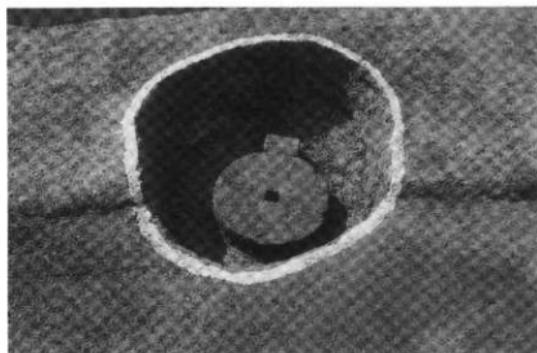
3. 2区全景（東から）



1. 2区流路以西
奈良時代ピット群



2. 2区中央付近
弥生時代流路



3. 2区東端付近
中世ピット

県道改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報集

福 万 遺 跡

原 中 村 遺 跡

平成 7 年 3 月 発行

編 集 香川県教育委員会

発 行 高松高速印刷株式会社

印 刷
